

中国キャンプ

2006年夏：8月9日～8月19日

＠中華人民共和国広東省プーニン新村

ワーク内容：

庭をセメントで整備、看護ケア

今回は、新村での初めてのキャンプということもあり、キャンパーと村人との交流がメインになった。また、今までリンホウ村と一緒にキャンプを行ってきた潮州の学生 (Care&Welfare) だけでなく、今回は JIA 広州委員会をカウンターパートに村のあるプーニン地域の学生なども参加した。

今後の方針：

新村でのキャンプ後、この村には大きなワークがないため、中国側との話し合いの中で今回を持って大きなワークキャンプを新村では行わないこととなった。しかし、リンホウ村同様、ミニキャンプ、ビジットを通して今後も関わっていく予定。今後のキャンプについては現在、リーダー原田真二が次のキャンプ地を下見中。詳細は、次の定例会で。

キャンプ後、一部のキャンパーは、以前 FIWC 関東がワークキャンプを行った広東省土光村、リンホウ村を訪問した。また、広西省桂林市で開かれた第3回 JIA ネットワーク会議にも参加した。そこでは、中国国内にある地域委員会の活動報告やさまざまなトピックでの話し合いが行われた。日本のキャンパーである FIWC 関西、九州、早稲田大学の Qiao メンバーとも中国キャンプについての現状活動報告、今後についてなどの話し合いを持つことができた。

次回春キャンプまでの国内での活動について：

11月11・12日に東京農業大学文化祭にて、模擬店を行う予定。下見によるキャンプ地決定後、キャンパー募集を行っていく。

機械について

(シンセサイザーをみて) こいつらさあ…こいつらってというのは、こいつら本当に人間みたいだから言ってるんだけどね、一村上龍

機械を使えば一日で終わるところを人間の手でやる。炎天を浴び汗にまみれてぐしょぐしょになった垢を流しスコップで土を掘り出し熱中症になりかけぶっ倒れそうになり太陽に焼かれたチビクロサンボみたいな肌が剥けるころ、今まで私たちの作業をじっと見ていた村人が、手伝いたい、と言ってきた。それを自分の耳で聞いたとき、御尻の穴にまで鳥肌が立った。それは機械には不可能なことだ。肉体労働というのは圧倒的なコミュニケーションの場だ。そこには「意思の疎通」というようなレベルとは違う、言葉を必要としない表現の中でもっとも美しいものの一つがある。それは一つの音楽的なコミュニケーションを形作る。身体によるコミュニケーションの力、より刺激的な外部へと肉体的に向かうことの解放感、それらは簡略化された機械産業の対極にある。人を見る目が豊かな村人たち、私たちを受け入れてくれて、有り難う。機械なんて、大嫌いだ。(八月、普寧村で)

<http://xinwc.exblog.jp/>

原田真二 blog TAIJI より